

暴力と社会の起源を求めて

——今村仁司の切り拓いたもの——

小林 敏 明

言葉がもっとも無力化するのとは暴力と死を前にするときである。独自の暴力論の開拓に献身してきた今村仁司の突然の死を前にしてふさわしいのは、だから唯一沈黙だけであるかもしれない。だが、このことはなにより今村自身はその生涯を通じて格闘しなければならなかった本質的なジレンマであったことを思うと、訳知り顔の沈黙もまた故人に対して礼を失する。今は駄弁を知りつつも今村の拓いた道を自分なりに跡付けてみよう。

力と暴力、闘争と戦争といった文化現象は社会科学と社会哲学にとって避けて通ることのできない根源的諸問題だといわなければならない。なぜなら、それらの現象は社会形成と社会体の運動や歴史の基礎にあるものであり、単なる逸脱的病理現象ではないからである。『暴力のオントロジー』 p.1)

『労働のオントロジー』と並ぶ、今村社会哲学の本格的開始ともいべき『暴力のオントロジー』の冒頭はこう述べていた。この今村による暴力現象への着眼とその主題化は、小は子供のいじめから大は世界を巻きこんだ戦争やテロルまで、さまざまな形で噴出する暴力に対して、スキャンダリズムのほか何ら有効な対応策をもちえないまま、ただ右往左往する今日のわれわれの社会にとって、いっそうその重要度を増している。人類は何千年の歴史をかけて、いまだにむき出しの暴力を克服する道を見つけ出していない。

そういうことを考えるにつけて思い出されるのは、あの二つの世界大戦の戦間期に二十世紀を代表する二人の知の巨人、アインシュタインとフロイトとの間に交わされた公開書簡のことである。このなかでアインシュタインは、そもそもいかにして人類は戦争を回避することができるのかという切実な問いを投げかけたのであったが、これに対するフロイトの回答は、じつに苦渋に満ちたものだった。人間から暴力衝動をなくすことは本質的にありえない。それは唯一文化によって逸らすことができるのみである。しかし、この文化による逸らしもまた最終的には人間にとって耐えられない次元にまで達するかもしれないというのがフロイトのペシミスティックな見通しであったからである（フロイト「戦争はなぜ」「文化の中にあることの居心地の悪さ」 etc.）。

このフロイトと同じように、今村にとっても暴力は人類にとって避けられない絶対的与件

暴力と社会の起源を求めて

である。しかも今村においては暴力の位置価値はさらに高められ、人類の社会、共同体のあるところ、それらは暴力を媒介してのみ成立するという。今村はこれを「コスモス創成暴力」と呼んだが、今村が高く評価していたベンヤミンならば「法指定暴力」と言ったことだろう。いいかえれば、われわれ人類は暴力を通さなければ、その暴力を防ぐ社会や共同体を結ぶことができないという根本的ジレンマに立たされているということである。今村の暴力論はだから、それが根源へ遡れば遡るほど、その論理の逆説性を先鋭化していくようにみえる。以下にその今村による先鋭化の道行きを具体的に追ってみることにする。

1. 構造主義人類学と暴力

今村がアルチュセールの紹介者として颯爽と日本のジャーナリズムにデビューしたことはよく知られた事実である。だが、このマルクス主義と構造主義の結合を図る新しい理論への関心は、今村をたんなるアルチュセーリアンにとどめることがなかった。彼のアルチュセール解釈はアルチュセールを超えて、さらに構造主義およびポスト構造主義全体への関心を呼び起こし、今村は雑誌『現代思想』を足場に八十年代日本における（ポスト）構造主義ブームの旗手のような役割を務めたりもしたのであった。ただし、こと今村暴力論にかぎって言えば、重要な意味をもつのはアルチュセールではなく、レヴィ＝ストロースの構造人類学との出会いである。レヴィ＝ストロースの功績としては親族構造と言語学的音韻体系との相同性の発見などがよく知られているところだが、今村のインスピレーションが反応したのは、同じレヴィ＝ストロースでも比較的目立たない著作『アスディワル武勲詩』に報告された以下のような神話であった。

傲慢で冷酷でもあった王女は従兄弟に、顔を傷つけることにより自分への愛情を見せてくれと要求する。彼は刃物で顔を傷つけたが、すると彼女は、その醜さの故に、彼を拒む。絶望に陥った彼は死のうと思って旅に出、畸形の王「悪疫」の国を冒険する。《悪疫》は、厳しい試練に耐え抜いた彼を魅力的な王子に変えてやる。

今度は従姉妹が彼を熱愛するが、彼は逆に彼女がその美しさを犠牲にするよう求める。（が、それはただ皮肉を言ったにすぎなかった。）醜くなった王女は《悪疫》の同情を惹こうとする。すると、彼の宮廷に仕える不具の人々が彼女に襲いかかり、骨を砕き体を引き裂いてしまう。（『アスディワル武勲詩』 p.52/3）

レヴィ＝ストロースがこの小さな神話に婚姻における（女性）交換システムの失敗を読みとったのに対して、今村の関心はむしろここに現れている暴力現象の方に向けられる。今村はこの神話の特徴は何よりも「暴力を中軸に転回する相互性」にあるとし、さらにこの悲劇

の中心に立つ王女を相互的な社会関係を維持するための宿命的な「犠牲／スケープ・ゴート」ととらえる。そしてここから導き出される次のような結論が、その後死に至るまで追究されつづけることになる今村暴力論の出発点となったのであった。

第二の現象は、二項的相互性の維持のために、第三項が絶対的に排除される、という社会関係に根源的に内在する論理である。私はこの現象を「第三項」問題と名づけた。第三項は、二項対立的関係（相互性）を維持したり、あるいは二項関係が危機におちいつている回復を要求したりするときには、必ず運命的に発生する社会関係の根本動学を示唆する。第三項は、相互性の存立のために、つねに必ず、暴力的に抑圧され、排除され、あるいは殺害される。（今村前掲書 p.29）

いわゆる「今村第三項排除論」の宣言である。今村は以後この社会関係ないし共同体形成の原理としての第三項排除のテーゼを補強すべく、人類学のみならず文学、歴史、社会科学等の分野にもその例証を求め、そこから彼の分野を超えたあくなき知の涉猟が始まる。この背景には構造主義ブームに平行するように、当時日本の論壇において文化人類学者山口昌男を中心として広がっていった「中心と周縁」というテーマ系が働いていたことはあらためて指摘しておいてよい。フランスのアナール学派が紹介されたり、今村の専門とした経済思想の分野において「経済人類学」なるものが喧伝されたのもこの頃である。この七十年代から八十年代にかけての人類学ブームの特徴を一言でまとめておけば、マイノリティ、異人、トリックスター、不具者といった「周縁（ペリ・フェリ）」的存在への注目と、その積極的な意味づけである。だから、こうした流れに乗るかのように、天皇制と周縁の結びつきを実証しながら既成歴史学の転倒を図った日本中世史家の網野善彦の一連の仕事などが一躍注目を浴びたりもしたのであった（これは今村の仕事にも影響を与えている）。

だが、こうした周縁論の応用である今村の第三項排除論は、本人も言うように（p.231）、もともとはたんなる人類学的関心から発したものではない。彼がアルチュセールの研究者であったことからわかるように、着想の本当のきっかけはむしろヘーゲルとマルクスにあった。活動家として六十年代の学生運動にも積極的に参加した今村の思想は当初からマルクスの資本主義批判に決定的に刻印されており、しかも彼があえて第三項排除論の仮説をたてえたのも、おぼろげながらマルクスの言説にそれに類する着想があるという確信を早くから抱いていたからである。レヴィ＝ストロースとの遭遇はいわば、そのいまだ明確な形になりきらなかったマルクス解釈の定式化を促進する触媒にほかならなかったのである。今村にとっても構造人類学が問題としたような言語体系や社会関係さらには共同体一般の成立が問題であったことは確かである。しかし、彼の最終的なターゲットはあくまでマルクスの批判した資本主義的な社会関係、すなわち近代市民社会の解析批判であった。後に彼が「近代」とい

暴力と社会の起源を求めて

う大きなテーマを相手にして少なからぬ著作を残すのも、そのことに由来している（『トランスモダンの作法』『近代とは何か』etc.参照）。

2. 価値形態論の思想系列

では、第三項排除とマルクスの間にはどのような関係があるのだろうか。今村が目にしたのは『資本論』冒頭で展開される商品論ないし価値形態論だが、その内容に立ち入る前に、戦後日本思想に果たした『資本論』の意味に関してひとつ指摘しておきたいことがある。すでに戦前の一九二〇年代からこの著作が日本の左翼運動や左翼知識人に大きな思想的影響を与えていたのは言うまでもないことだが、とりわけ戦後思想におけるこの著作の扱いには他の国にない日本独特の現象がみられるということである。それは『資本論』第一巻、しかも冒頭の商品分析に対する異様なまでの注目度である。

周知のように、経済学者宇野弘蔵は早くから『資本論』をたんなる資本主義批判の書としてではなく、新たなマルクス経済学の「科学的」原理が語られているものとして解釈しようとした。なかでも、冒頭の商品分析に展開される価値形態論は、いわば資本主義的社会関係の中核をなす「細胞」を扱ったものであるとされ、これを基点に進められた彼の『資本論』解釈は、やがて宇野経済学の「原理論」と呼ばれるにいたったのであった（その成果が有名な『経済原論』である）。そしてさらにそれを含む彼の「原理論」「段階論」「現状分析」の三段階構想は、物理学者武谷三男の自然認識の三段階論と並んで、少なくとも六十年代までは左翼知識人に少なからぬ影響を与えていたのである。

商品の商品形態として分析するということが、これが科学としての経済学の真髄をなす点である。それは商品の物神性の暴露としては、いわゆるブルジョア的イデオロギーの批判にほかならない。（『資本論入門』p.41）

宇野にとって、イデオロギー批判が可能となるためには、その批判視点となるべき「原理」としての「科学としての経済学」がまず立てられねばならなかったのである。興味深いのは、こうした宇野による商品分析の学問的位置づけが呼び水となったかのように、その後それに発するいろいろな思想上のアイデアが生み出されたということである。そのひとつが廣松渉の「物象化論」であった（『物象化論の構図』『資本論の哲学』etc.）。廣松は宇野経済学を批判的に踏襲しながら、この商品分析から独自の哲学を発展させた。それをごく簡単に確認しておくならば、個々の商品生産物の価値は、一般に信じられているように、たんにそれに投下された具体的な人間の労働量によって決まるのではなくて、あくまでも商品交換の側から規定されるということである。商品という実体がそれらの関係を規定するのではなく、逆に

関係の方が個々の商品を規定するというこの解釈は、廣松の場合さらに敷衍されて、関係の一次性・物的存在の二次性（物象化的構成態）という哲学一般のテーゼにまで高められていたのであった。だから、主著『存在と意味』などに展開されたこの「関係の一次性」を基調とする廣松の共同主観論は、もとはといえば、『資本論』第一巻の商品分析の独自の解釈に端を発しているといえることができるのである。

同じように商品の価値の関係性に眼を向け、そこから自分の発想を展開していったのが、「私にとって、マルクスを『読む』ことは、価値形態論において『まだ思惟されていないもの』を読むことなのだ」と述べた若き柄谷行人であった（『マルクスその可能性の中心』p.21）。柄谷はこの価値形態論にソシール記号論を導入し、貨幣という一商品が中心化することによって同一性の世界ないし超越論的な「価値」が生まれること、そしてその本来中心に位置する貨幣が「非中心化」されるとき逆に「単純な価値形態」が成立するという仕組みを明かすとともに、さらに商業資本と産業資本の本質を次のように解釈した。

われわれは、商人資本がいわば空間的な二つの価値体系の——しかもそこに属する人間にとっては不可視な——差額によって生じることを明らかにしたが、産業資本はその意味で、労働の生産性をあげることで、時間的に相異なる価値体系をつくり出すことにもとづいているといってもよい。（同書 p.65）

この資本主義の命ともいべき「剰余価値」をシステム間の「差異」に見ようとする柄谷の着眼は、経済学ではその後岩井克人などによって引き継がれたが（『ヴェニスの商人の資本論』）、柄谷自身はここから互いに異なる共同体どうしの関係や共同体とその「外部」といった一般的な問題次元にまで進み、さらにはそれをキルケゴールやレヴィナスなどに見られる「他性」や、ゲーデルの「自己言及のパラドックス」といった哲学的問題にまで踏みこんでいたのであった。

私の指摘しておきたいことというのは、今村の暴力論もまさにこうした先行の、または同時代のディスクルスの息吹を呼吸するようにして生まれ、それらが一体となって戦後日本思想においてひとつの特異な流れを形成したということである。それを念頭に、以下今村暴力論とマルクス価値形態論の具体的な関係に入っていくことにしよう。まずは、その『資本論』冒頭に述べられるマルクス価値形態論の内容から。

第Ⅰ形態－単純な価値形態

第Ⅱ形態－全体的な、または展開された価値形態

第Ⅲ形態－一般的な価値形態

第Ⅳ形態－貨幣形態

確認のために、簡単に説明しておく、第Ⅰの「単純な価値形態」というのは、ある一定量の商品ともうひとつの別の商品との間に一対一の交換関係が成り立っていることである。そしてこれが他のもろもろの商品にも連鎖的につながっていくのが第Ⅱの「展開された価値形態」である。第Ⅲ形態では、この商品の無限連鎖のなかからひとつの商品が選び出され、それがいわばその連鎖全体を代表するかのような位置に押しやられ、他の諸商品がこの選び出された商品との交換関係によって表示される。これが「一般的な価値形態」である。そしてこの選び出された特権的商品が、さらにもはやそれ自体では使用価値をもたない貨幣という特殊な媒体に置き換えられるのが第Ⅳの「貨幣形態」にほかならない。このなかで今村が暴力論との関係で注目したのが第Ⅲの「一般的な価値形態」であった。

第Ⅲ形態では、諸商品が場所を占める位置の相互排除がはっきりと出てくる。相対的価値形態の位置に立つ諸商品は一般的等価形態の位置から排除され、反対に、リンネルであれ何であれ、一つの商品が一般的等価形態の位置を占めるときには、この一つの商品は相対的価値形態から排除される、位置の相互排除、非両立性は、すでに原理的には第Ⅰ形態で出つくしているが、商品的な社会関係の進展に応じて、とりわけ第Ⅲ形態で相互排除の戦いという相が全面的に現出する。(『暴力のオントロジー』 p.63)

今村によれば、ひとつの商品が選び出されるということは、見方を変えていえば、その商品が全体の連鎖系から「排除」されることを意味する。だが、この排除された商品はたんに排除され、棄却されてしまったわけではない。そうではなく、それは排除されることによって、逆にその連鎖系の全体に交換という共通の場を与え、しかも自らはその交換関係を代表する特権的地位を獲得するのである。このメカニズムは、今村には、あの人類学がもたらした共同体形成のための第三項排除とまったく同じ事態と映った。マルクスの分析はむしろ経済学に限られている。だが、今村はまさに廣松や柄谷と同じように、ここに「まだ思惟されていないもの」を読みとろうとしたのである。彼が「マルクスの商品論（価値形態論）のなかには、社会形成にかかわる根本問題がすべて含まれている」（同書 p.65）と述べたのも、そういう意味からである。

ところで、一般的価値形態において任意の一商品が排除的に選び出されるというのは、ある意味で矛盾である。なぜなら排除とは、より強く表現すれば、たたき出されることであり、他方選出とは祭り上げられることだからである。貨幣は排除されながら重宝がられる。より先鋭化して表現すれば、あたかもあの宗教儀式に使われる贄（にえ）のように、穢れたものであると同時に聖なるものとして扱われる。後の今村の言葉でいえば、「下方排除」と「上方排除」である。あのいまだ根強いイデオロギーとしてのユダヤ拝金主義に対する軽蔑と憧憬

の両価的感情は、あるいはそういう貨幣の存在論的アンビヴァレンツに負っているのかもしれない、とさえ思われる。いずれにせよ、今村のいう排除という事態には正と負のまったく別方向にはたらく両義性が含まれているわけだが、この両義性はまたしても文化人類学的に保証されているのであった。それは一度有徴化され、部族からたたき出された人物が、あらためてその部族を支配する王として帰還するという人類学的両義性と同一構造を示しているからである。

さらに重要なことは、すでに述べたように、この今村の暴力論が近代市民社会を最終ターゲットにしていたということである。すなわち第三項排除の結果としてもたらされる「同一」で「合理的」なシステムとしての近代市民社会である。今村にとって近代市民社会とは、それ自体が暴力的存在であるような合理的同一性の世界であった。だから今村がその後アドルノに代表されるような啓蒙的合理主義批判や同一性批判を特徴とするフランクフルト学派に接近していったのは、ことの必然でもあったし、なかでも暴力論をも射程に入れていたベンヤミンの歴史哲学への特別な想い入れも、そうしたコンテクストからみれば、きわめて当然のことだったのである（その意味で、翻訳とはいえ、三島憲一らとの大著『パッサージュ論』の共訳作業は今村の全仕事のなかでも大きな位置を占めている）。

ところで、この今村の暴力論を含めて興味深いのは、廣松、柄谷、今村に共通する発想として、いずれも第Ⅲないし第Ⅳ形態に中心的な意味を見出したことである。最近の例でいくと、たとえばスピヴァクなどが、この価値形態論の四つの形態を具体的な発展過程ととらえ、その第Ⅱ形態に植民地経済の特徴を見いだそうとしたように（『ポストコロニアル理性批判』p.155ff.）、これらの形態をそのまま具体的な歴史的発展段階と解釈する可能性がないわけではない。これに対して、廣松においては認識存在論的關係が、また柄谷においては共同体ないしシステム間の關係が一次の意味をもつため、第ⅢないしⅣの形態が重要視され、ⅠとⅡはいずれもそうした原基的關係性の二次的産物または日常的な映現形態にすぎないと解釈されるわけだが、似たことが今村の論理にも妥当する。今村にあっては第Ⅲ形態こそがあらゆる共同体に内在する「構造的關係」を端的に表したものであり、第ⅠとⅡの形態は、あくまでその構造を前提にしてはじめて可能となる、やはり二次的な映現形態にすぎないからである。だから、その意味で彼らの論議が七〇年ごろから始まる構造主義ブームと連動しえたのは、ある意味で必然だったと言えるのである。

3. 暴力の存在論的起源

さて、今まで見てきたように、第三項排除を核とする今村の暴力論はきわめて構造的かつ図式的な姿をしている。むろんそれには文字通り構造主義の影響が与かっている。だが、構造主義自体がやがて「差異」や「脱構築」を謳うポスト構造主義へと脱皮していったように、

暴力と社会の起源を求めて

今村においても、その暴力論は第三項排除の図式を指摘するにとどまっていることはできなかった。今村にとって第三項排除の図式がゆるぎないものであったとしても、そもそも人間にとってどこからその「排除」が出てくるのかが、まだ解き明かされていないからである。この問いは、場合によっては形而上学や神秘主義にさえ接するような、すぐれて存在論的な問いである。じじつ死を前にした今村はこの問題に集中的に取り組んでいた。その渾身の成果が、早すぎた死のために自らはついに手にすることのできなかった、彼のライフ・ワークともいべき『社会性の哲学』にほかならない。この著作はフランス現代思想の権威たる今村の面目を躍如する力作でもあるが、ここではそれまでに渉獵された現代思想の数々が新たに今村社会哲学構想のなかに摂取消化され、もって一大思想体系を作り上げるにいたり、おそらく今後この著作を抜きに今村理論を語ることはできないであろう。以下、この著作にしたがって、今村暴力論の先鋭化のプロセスを跡付けながら、あわせて私自身の問題提起をも試みてみたい。

もう一度繰り返しておけば、第三項排除の具体的モデルは犠牲ないしスケープ・ゴートと呼ばれる現象であった。だから、第三項排除の必然性は人間存在にとっての犠牲現象の必然性に帰着することになる。いったい今村はこの必然性をどこに見ていたのだろうか。まず引用から始めよう。

人間の原初的存在は無限内包摂であり、無限的能与作用による自己の所与存在を負い目として感じつつ存在することである。自己の現実存在を「与えられ」と感じるのが、負い目を負うことであり、その負い目を解消させる行為が自己贈与であった。自己保存的な現実存在（現世内存在）は自己破壊的傾向に不断に脅かされている。その意味では生きることすなわち自己保存は自己破壊のたえざる抑圧であり、さらには限定否定によって破壊の方向を内から外へと転換することである。根源分割から生まれた人間存在は無限に向かう傾向（自己破壊的贈与）と有限な現世に向かう傾向（自己保存）を本質的要素として内在させている。（『社会性の哲学』p.111）

このあまりにも凝縮された表現は説明を必要としよう。まず、この人間存在を自己破壊と自己保存のディオトミーからとらえる基本構造には、スピノザの自己保存論やフロイトのエロス・タナトスの二大欲動論の影が落ちているのだが、さしあたりの問題は暴力に直結する「破壊」のファクターである。周知のように、フロイトのタナトスには「自らの死への志向」と「他者に対する攻撃性」の両義が含まれているのだが、今村にあっては、論理上まず「自己破壊」が原基的位置におかれる。言い換えれば、他者への暴力ではなくて、自分自身に向けられた暴力が先行するのである。しかも、それは「自己贈与」という規定を受けている。だから、まずこのことが明らかにされなければならない。

今村によれば、人間存在にとっての第一歩は、現世に「与えられてあること」に始まるという。これは自らの意志によって選び取られたものではない絶対の所与性ないし贈与性である。とはいえ、無神論者の今村にとって「与える神」は問題とならない。それは「ただ与えられてある」のだ。別の言い方をすれば、何であるかもわからないような「何ものかが与えている」、そういう「与えられ」である。だからこの「与える働き」は何か実体的なものではありえない。それは言語にも表象一般にもかからない、いわば認識不可能な X である。逆にいえば、われわれの存在や認識はこの「与えられ」そのものから始まるということである。こうした考えは「es gibt」や「il y a」を問題にしたハイデガーやレヴィナスの考えに接近している。また、これが絶対の贈与としてとらえられるところには、今村が高く評価していたバタイユの「普遍経済学」の影さえ認められないわけではない。いずれにせよ、それはかろうじて対象化不可能な「存在感情」によって「感じられる」にすぎない。

感受作用としての「感じる」は、この〔与える〕働きを対象化しないで「把握する」存在感情は、存在するものなしにはありえないが、与える働きを存在するものを通して非対象化の仕方を受容する。存在を感じることは、存在を与える働きを感じるのである。(同書 p.9)

だが、この対象化できない存在感情は同時に「根源的分割」の瞬間でもある、と今村は言う。そしてその分割はやがて言語による差異化、分節化を可能にし、ひいてはわれわれの対象化的認識を可能にする、その出発点でもある。根源をもたない「根源的分割」、それはデリダの「差延」やレヴィナスの「イポスターゼ」を連想させる。あるいは「無の自己限定」を言った西田をさえ想わせる。今村の構想が形而上学や神秘主義に接するといった所以である。じじつ今村自身「人間はおそらく神秘主義的要素を免れることはできない」(p.72)と告白している。

ところで、この人間存在の原基的あり方のどこに暴力への契機が見いだされるというのだろうか。それは始まりとしての「与えられてあること」という絶対の所与性そのものにある、と今村は言う。与えるものが何であれ、与えられているという受動性の感情は、それ自体が「負い目」の感情である。負い目 = 罪 Schuld とは、かつてニーチェがその語源に遡って明らかにしたように、「借り Schulden」の意識にほかならない(『道徳の系譜』)。借りである以上は返さなければならない。つまり、人間とは目に見えぬ根源ならぬ根源に向かって借りを返さなければならない存在なのである。この返済が今村のいう「自己贈与」であり、そしてその究極形態が「自己犠牲」としての「自己破壊」にほかならない。さきに今村の暴力論が他者に対する攻撃性ではなく、自己に向かう暴力から始まると述べておいた所以である。

だが、ここにひとつの根本的矛盾が発生する。絶対的所与性に対する返済として自己を破

暴力と社会の起源を求めて

壊してしまえば、人間は生きていくことができないという明白な矛盾である。最初に述べたように、今村は自己破壊と自己保存のディコトミーを立てていた。つまり人間は自己保存欲動にしたがって生きつづけようと思えば、もう一方の自己破壊（の欲動）と何らかの形で折り合いをつける必要が出てくるのである。自分は生き延びながら、なおかつ返済を果たすという目的のために、どのような折り合いの形があるのか。それは「破壊＝犠牲」を自己から他者にずらすことである。心理・論理的にはこの他者は必ずしも他の人間である必要はない。折り合いさえつければ、それは物でも動物でもよいことになる。それはフロイトが『トーテムとタブー』でも明らかにしたとおりである。だが、人類の大半はこの代理犠牲を同じ人間のなかにも見いだしたのであった。今村にとって文字通りのスケープ・ゴート（身代りの山羊）からホロコーストまで、子供のいじめから貨幣まで、それらはいずれも第三項排除としての「暴力」の発現形態にほかならない。

こうして社会のなかで、個々人は自身で引き受ける自死欲望（無意識的な欲望）を他人に移転することで満足し、自死欲望の充足を「ふり」として実現するが、個人のそのような「観念論的」行動こそが「物質的な」社会構造を構築していく。この欲望はたとえば経済生活のなかでも働く。揭示権力の形成では自死欲望は生きている他人の犠牲へと向かうが、経済ではこの犠牲形成欲望は物体へと移転させられ、貨幣形式を生み出す。（同書 p.113/4）

今村にとっては、だから「経済戦争」はたんなるメタファーではない。それは文字通りの戦争と並ぶ、システム化された「暴力」の有力な一現象形態なのだ。今村には、ではこうした「暴力」はどう克服されるべきなのか、そしてそれはもうひとつの柱たる「労働」論とどう関係するのか、というさらなる難題が課せられていたのだが、病という別種の「暴力」はついに今村にそれを許さなかったのである。もはや今村の立てた壮大な構想が明らかであろう。むろん、これは今村の「社会性の哲学」のすべてではない。しかし少なくとも彼の追求した暴力論がとてつもない広がりや深さをもって構想されていたことがわかるであろう。洋の東西を問わず、私はこれ以上に暴力問題を突きつめた思想家を知らない。そしてそれへの解答は次の世代に向けて開かれたままになっているのである。

そこで遺された者の一人として最後に問題提起をひとつ。それは今村の暴力存在論の原基にもかかわる問題である。すでに見てきたように、今村は人間存在の絶対的所与性ないし贈与性から暴力の「起源」を説こうとした。つまり絶対的贈与に対する返済としての自己破壊が人間的暴力の起源だとされた。この論理の筋立てからいえば、他者や外部に向かう攻撃としての暴力は、あくまでこの自己破壊の転移ないしずらしということになる。そこから湧いてくる私の率直な疑念は、人間の暴力はそもそもの初めから「直接」他者に向くことはない

のだろうか、ということにあるが、それよりもこの疑念に直接かかわる形で疑問を投げかけておきたいのは、こういう暴力起源論にかかわってよく引き合いに出されるフロイトのタナトス概念に対してである。

さきにも触れておいたように、フロイトはこの概念に「攻撃欲動」と無機状態に還る「死」の両義を込めたのだが、そもそもこの両ファクターの関係はどうなっているのか。今村の理論にからませて言えば、もし人間存在にとって絶対的贈与が問題になるのだとすれば、これに対する返済がなぜ自己「破壊」という一種の攻撃にあって、たんなる「死」であってはならないのか、という疑問となる。たんなる無機状態への帰還としての死が問題であれば、攻撃欲動を第三項に転化する必然性が消えてしまうからである。それともタナトスは、そもそもものあり方からして自・他や能動・受動の区別を無効にしてしまうような次元を開示しているのであろうか。またタナトスとエロスはたんなる相対立する原理ではなく、バタイユが示してみせたように、むしろ不即不離の統一体をなしていないのだろうか等々、といった問題はまだまだ十分に解き明かされていないように思える。このように、今村理論をより有効なものとして継承するためにも、私は「タナトス」概念や「死」「攻撃性」といった概念群の精緻化とその再検討が必要であるように考えている。おそらくそれには現代生物学などとの本格的な理論的つきあわせなども必要となろうが、残念ながらそうした心惹かれる仕事は現在の私自身の能力を超える。

今は亡きあのすばらしい笑顔を惜しみながら

二〇〇七年十月一日

主要参考文献

- 今村仁司『暴力のオントロジー』勁草書房 一九八二年
 ——『排除の構造』ちくま学芸文庫 一九九二年（初版青土社一九八九年）
 ——『社会性の哲学』岩波書店 二〇〇七年
 宇野弘蔵『資本論入門』講談社学術文庫 一九七七年
 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』講談社 一九七八年
 廣松渉『物象化論の構図』岩波書店 一九八三年
 フロイト・S.「戦争はなぜ」『フロイト著作集』11 人文書院 一九八四年
 レヴィ＝ストロース・C.『アスディワル武勲詩』（西沢・内堀訳）青土社 一九七四年
 スピヴァク・G.C.『ポストコロニアル理性批判』（上村・本橋訳）月曜社 二〇〇三年